座位によるアルペンスキーの用具

チェアスキー

チェアスキーは、立位でスキーをすることができない方が使用する、座位によるアルペンスキーの用具で、１本のスキー板を装着して滑降します。その際、バランスを取るために専用のストックとしてアウトリガーを用います。1976年、神奈川県総合リハビリテーションセンターのエンジニアによって開発がスタートしたチェアスキーは、1980年のＩ型機完成からからソチ仕様を経て現在も進化を続けており、2014年ソチ冬季パラリンピックのアルペンスキーでは、日本製チェアスキーの上位１０位の使用率が50%を超えるほど、世界から注目されています。

現在では、チェアスキーのリフトアップ機能を用いることで、リフトへの乗降も可能となっているため、リフト係りの協力が得られれば、日本中どこのスキー場へ行ってもスキーを楽しむことができます。また、チェアスキーでの滑降が難しい方に向けて、２本のスキー板を装着して滑降できるもの（バイスキー）もあります。

日本チェアスキー協会では、選手育成やチェアスキーの啓発に向けて日本チェアスキー大会を毎年開催しています。そこでは、スキー指導や介助指導だけでなく、雪山の景色や風を切って滑降する爽快感などを楽しむためのスキーツアーをおこなっており、神奈川県総合リハビリテーションセンターのスタッフも毎年サポートに携わっています。

ご興味ある方は是非スタッフへお声がけください。

森井大輝選手の滑降

バイスキーによる滑降

日本チェアスキー大会(2014年会津高原たかつえスキー場)の様子

チェアスキーの歴史と日本人選手の活躍

1986年（Ⅱ型機）
第3回身体障害者冬季世界選手権大会
シットスキーの部
回転（銅）
総合（銅）

1990年（Ⅳ型機）
第4回身体障害者冬季世界選手権大会
シットスキーの部
スーパー大回転（銀）
大回転（銅）
回転（銅）

1998年（長野モデル）
第7回長野冬季パラリンピック
シットスキーの部
滑降（金）
回転（金）
スーパー大回転（銀）
大回転（銅）

2002年（ソルトレイクモデル）
第8回ｿﾙﾄﾚｲｸ冬季ﾊﾟﾗﾘﾝﾋﾟｯｸ
シットスキーの部
大回転（銅）
回転（銅）

2012年（バンクーバーモデル）
第8回ﾊﾞﾝｸｰﾊﾞｰ冬季ﾊﾟﾗﾘﾝﾋﾟｯｸ
シットスキーの部
スーパー大回転（金、銅）
滑降（銀）
大回転（銅）
回転（銅）

1980年1月　Ⅰ型機

小丸山スキー場にて雪上テスト
滑走、回転、停止がスキーヤーのコントロールで可能。

1986年　Ⅲ型機

胸髄上位損傷者でも30°を超える斜面での滑降が可能
リフト乗降の自立が可能

2006年（トリノモデル）
第9回ﾄﾘﾉ冬季ﾊﾟﾗﾘﾝﾋﾟｯｸ
シットスキーの部
大回転（金、銀）
滑降（銀）
スーパー大回転（銀）

2014年(ソチ仕様)
第9回ｿﾁ冬季ﾊﾟﾗﾘﾝﾋﾟｯｸ
シットスキーの部
滑降（金、銅）
スーパー大回転（金、銀）
回転（金）

1976年1月　試作1号機

石打スキー場にて雪上テスト
結果は回転不能、停止困難であった。

1983年　Ⅱ型機

30°を超える急斜面や不整地での滑走が可能。平地、斜面の登行が可能。

1990年　Ⅳ型機

Ⅲ型機に比べ高速で高度な滑走にも対応可能

2002年
ソルトレイクモデル
リフト搭乗性の向上、
ｵｰﾀﾞｰﾒｲﾄﾞｼｰﾄ整作法の採用

2010年
バンクーバーモデル
(日進医療器㈱)

サスペンション機構部と主フレームを中心として、高い滑走性能の維持と信頼性を向上を目指したモデル

バンクーバー冬季パラリンピックアルペンスキー競技
スーパー大回転表彰台
金：狩野　亮
銅：森井大輝

1998年　長野モデル
(日進医療器㈱)

サスペンションリンク機構とショックアブソーバーの性能や取り付け角度を変更

2006年　トリノモデル
(日進医療器㈱)

ソルトレイクモデルの問題点を見直したフレーム及びショックアブソーバーの開発。
選手の滑走イメージに合わせたシートの製作
レッグカウルの製作

2014年
ソチ仕様

選手個々の要望を取り入れた試行的な開発
フレームの軽量化や全長の短くしてマスの集中を図っている